

## さきたま抄

「3時38分」を指して止まった時計、床の一部が抜け落ちた体育館…。埼玉県内に配置された福島県浪江町復興支援員らの活動に同行し、避難指示が解除されていなかった町内に足を踏み入れた2014年5月、町立請戸小学校で目にした光景を思い出した▼浪江町震災遺構検討委員会は2月8日、東日本大震災による大津波と東京電力福島第1原発事故に見舞われた請戸小の保存を答申した。建造物の震災遺構は、福島県初という▼あす11日は、震災8年の節目。復興庁によると、福島など被災各県から県内に避難している被災者は3475人(2月7日現在)もいる▼法政大学教授の西城戸誠氏と金城学院大学講師の原田峻氏は2月、震災発生直後から7年半の県内支援活動を考察した「避難と支援―埼玉県における広域避難者支援のローカルガバナンス」(新泉社)を出版した。両氏とも県内で被災者支援活動に関わりながら、社会学者として支援の全体像を検証。課題を指摘している▼両氏は今後も、活動と調査を継続する考えだ。「いつまでこの調査・支援を続けるべきか、…そこに広域避難者支援というテーマの本質がある」と書く▼原発事故の避難者に対して、国は早期の帰還政策を進める。そうした状況で、県内避難者の実像が見えなくなってきた。だからこそ、彼らを忘れず寄り添い続けること。また8年、震災は終わっていない。

2019・3・10